

因陀羅網 Indra's net ~ 今、ここでコミュニケーションを生きる

特集

# 共同体・コミュニティが 行政を変える



前回に予告しましたが、今回の特集は2014年3月1日に神戸大学で行われた日韓国際シンポジウム「コミュニティの変容と共創—グローバルな視点から生み出す市民的公共性」取材した内容に基づいたものです。

この特集のために「名前のない新聞」は、神戸大学のシンポジウムの公式的な日程のほか、市民たちが主体になって準備した別途企画の懇親会、そして次の日に行われた交流会まで丸ごと取材されました。この交流会は神戸の淡河にあるパーマカルチャー関西で、韓国側のゲストを含む、沖縄、韓国からの参加者とトランジション・タウンという名の下でコミュニティ活動を行っている浜松の若いグループなど、30人程度が参加して活発な討論、分かち合いを行った大変有益で意義あるものでした。

「名前のない新聞」は40年近く、資本と組織を持たない「小さな人々」の世界と彼らの動きを、外部の力を借りず皆と共有したいという姿勢を持ち続けてきたミニコミ新聞だと思います。紙面の関係上、非常に熱く盛り上がり真摯だった二日間の様子と内容を全部は共有出来ませんが、アカデミックな世界だけではなく、一般の市民社会と地域社会に広く開かれた大変意義あるシンポジウムだったので、ユニークで充実した内容の新聞が出来たと自負します。私自身シンポジウムの主催側に関わった一人ではありますが、この新聞の特集は、あくまでも神戸大学とは関係のない「名前のない新聞」の取材記事であることをお断りしておきます。

## ■ なぜこの特集を組んだのか

この新聞の読者はすでにご存じだと思いますが、私はこのミニコミ新聞に、不定期的ではありますが、長いあいだ「共同体・コミュニティ」関係の連載を書き続けてきました。そして、今は自分の今までの「共同性・共同体」という「公案」に対して一つの区切りを付ける時期が来たと考えています。もちろん、仏様のようにこれらの問題意識の理知が分かかってきて

自由になったわけではありません。いろいろと理由はありますが、まず一つだけ言えることは、私自身の取り組みや問題意識をもう一度原点に戻って考えること、そしてその原点を自分の生活と生き方に結びつける基礎を見直す時が来たという実感からです。抽象的で漠然としたものに聞こえるかも知れませんが、これは、まさに自分自身の生きる「共同体的関係網」との見直しでもあります。

こうした「転換期」に立たされていると思っている時に、丁度「コミュニティ」関連の企画が大学の主催で用意され、日韓両方の大物の活動家、哲学者から今日のコミュニティについてお話を聞ける機会に恵まれることになりました。何よりも、今日あらゆる形でコミュニティ的な生き方を実践しながら生きてきた、もしくは生きようと様々な取り組みをしている現場の人たち、こうした動きをどう受け止め公共の領域で語って行くか悩んでいる人たちが、韓国、東京、水俣、沖縄、三重、滋賀、京都、奈良、大阪、神戸、綾部…など、全国から集まってきて、学術的な場と参加者たちの相互コミュニケーションが行われたユニークな場でした。日本では、特に東北大地震と福島原発事故の後、共同体的結束の生活形態が現地及び避難生活の場でも生まれてきており、共同体をめぐる一連の動きが原発問題と同時に一気に注目されているようです。不安定な社会においては様々な形の一時的な共同体が生まれ、また消えていく傾向があります。しかし、福島原発事故を契機に大きな転換期を迎えている共同体的現象は「不安定」という前提付け以上のものとして注意深く見届ける必要があると思います。

一方、韓国では1980年代の後半辺りから市民主体による共同体的結束、運動が活発に展開されましたが、最近では行政側の積極的な政策が打ち出されるなど、「共同・シェア・共同体・コミュニティ」などをめぐる社会的現象に関心が高まっています。2007年には社会的企業育成法がつくられ、2012年「マウル共同性づくり支援条例」と「協同組合基本法」、2013年「多文化家族支援法」に至るまで、市民主導の様々なコミュニティづくりと結びつく法律

がつくられました。

こうした日韓で起こっている共同体・共同体的結びつきの多様な取り組みと変化は、今まで「草の根」の向こうに対立的な存在として位置づけられ認識されてきた「行政」や「市場」が「草の根」と協力し合える「新しい領域」が生まれ出る可能性をも示唆しています。本質的には異なるこれらの世界が、お互いの性質をコントロールし合う知恵を出し合って協力的な世界を築いて行こうとする新しい「共創」の世界が見えてきているということです。韓国のソンミ山マウルも日本の上野村も、市民や住民たちが共通のビジョンのもとで始まった様々な共同性の結合が地域社会全体を変え、さらに行政を動かしている例を見せてくれています。

今日私たちに与えられている課題は、コミュニティの多様性に対する批判的な視座ではなく、社会の多様性を維持持続させるために求められていた「社会統合」機能が失われつつある地点でコミュニティ現象が高まってきたことです。今、日韓をはじめ、世界的に起こっている共同体的現象は、むしろ失われた社会統合の機能を回復させる新たな構造づくりを目指しているものとも言えるかもしれません。警戒すべきことは共同体の多様化よりも、多様性の画一化、人間の市場中心的な物象化と個人化、孤立と排除、差別と異様な全体主義ではないでしょうか。個人の帰属や安心・安全の希求が市場にしか依存できなくなった現状は非常に厳しく考えて行かなければなりません。「共創」の力をのばして「差異」と「差異」の助け合いの世界を創って行こうとする人たちに、この特集がささやかなヒントになってくれるとうれしいと思います。「親密な居場所と公共的組織体」の間の、ある曖昧な位置(The ambiguous status of communes somewhere between being private homes and public institutions)にある多様な共同体的な実践・実験は、私たちの社会に生命力を与え、より心豊かな世界への想像力・想像力をもたらすに違いありません。